或問　WAKUMON　117
No.28,（2015）pp.117-131

日本近代軍事用語の成立に資する漢籍とその語彙

仇　子揚

はじめに

現代における日本語と中国語に、「大砲」、「地雷」などの兵器名や、「会戦」、「突撃」、「殲滅」などの軍事戦術用語がある。これらには、同形の漢語が多く用いられていたことがイメージされる。一部に、意味上の相違という問題もあるが、多くの場合、同じ漢字が使用されていた中国と日本において別々に造語されており、一方が他方から借用していたと考えられる。つまり、中国由来の在来漢語があれば、和製の新漢語もある。

こうした日中同形軍事用語について、筆者は修士論文で、1909 年出版の『和独兵語辞彙』を取り上げ、同書に収録された軍事分野の用語として専門性の高い漢語を研究対象としている。日中同形語として認められるものの数や両言語の中での位置づけなどについて調査した。その結果、伝統漢籍から使用例が発見できる在来漢語と思われる語は、調査対象全体の約 79%という大きな割合を占め、圧倒的に多いことが明らかとなった。もちろん、この調査はあくまでも『和独兵語辞彙』出版時期の 1900 年代という限定的な範囲で反映された結果である。だが、少なくともその時代における軍事用語では、大部分が古来の漢籍語に由来しており、それをそのまま使用していたのだと思われる。

在来漢語が、なぜこれほど大きな割合を占めるのか。この点については、当時時間の制約上、未解決の問題も多く残された。そこで、本稿ではあらためて、近世日本兵学成立経緯並びにその時代背景、さらに中国から流入した漢籍資料とのかかわりについて考察する。その上で、上記のような在来漢語が多く使用された要因や後の幕末・明治期における近代軍事制度成立の際に、どのような役割を果たしたのかについて解明することを目的としたい。

1　近世日本における漢籍兵書の受け入れ

日本における軍事理論が、本格的な学問研究として始まったのは江戸幕府成立以降である。天下がすでに安泰であり、戦争など稀な時期となると、戦国時代に蓄積された軍事知識を体系化しようとする動きの出てきたことがその理由であると考えられ、すなわち、これは兵学の成立である。

前田（2006）では、江戸時代兵学の成立経緯について、

> 近世日本の兵学は、基本的には戦国末の軍隊組織の統制法をベースにしていたが、その理論化にあたっては、中国の朱子学や兵学の言説を利用していた。

と述べる。そして、中国の兵学の受容について、①兵法の代表的古典とされる七つの兵法書である武経七書の出版と解読と②近世明代の兵家思想と兵学書の受容であるというような二つのルートがあることを主張している。

このような中国の兵書典籍について、まず『四庫全書総目提要』[1]からその代表的なものが観察される。表‐1 と表‐2 では、それらを整理して例示する。

表‐1『四庫全書総目提要』に紹介されている兵書（巻九十九・子部九・兵家類より）

著作名	巻数	著者	版本
握奇經	一卷	漢・公孫弘	浙江范懋柱家天一閣藏本
六韜	六卷	周・呂望	通行本
孫子	一卷	周・孫武	通行本
呉子	一卷	周・呉起	通行本
可馬法	一卷	戦国・穰苴	通行本
尉繚子	五卷	周・尉繚	通行本
黄石公三略	三卷	漢・黄石公	通行本
三略直解	三卷	明・劉寅	浙江範懋柱家天一閣藏本
素書	一卷	宋・張商英	江蘇巡撫采進本
李衛公問對	三卷	唐・李靖	通行本
太白陰經	八卷	唐・李筌	浙江範懋柱家天一閣藏本
武經總要	四十卷	宋・曾公亮丁度など	江蘇巡撫采進本
虎鈐經	二十卷	宋・許洞	安徽巡撫采進本
何博士備論	一卷	宋・何去非	浙江鮑士恭家藏本
守城錄	四卷	宋・陳規	永樂大典本
武編	十卷	明・唐順之	江蘇巡撫采進本
陣紀	四卷	明・何良臣	浙江鮑士恭家藏本
江南經略	八卷	明・鄭若曾	兩江總督采進本
紀效新書	十八卷	明・戚繼光	山東巡撫采進本
練兵實紀	九卷	明・戚繼光	山東巡撫采進本
練兵雜紀	六卷	明・戚繼光	山東巡撫采進本

[1] 『四庫全書』の編纂の過程で作成された、経・史・子・集の四部分類に区分した各文献の提要をまとめたもの。合計 10254 種、172860 巻の、春秋戦国時代より清朝初期に至る文献が収録されている。

表 - 2『四庫全書総目提要』に紹介されている兵書（巻一百・子部十・兵家類存目より）

著作名	巻数	著者	版本
握機經	三卷	明・曹允儒	浙江巡撫採進本
握機緯	十五卷	明・曹允儒	浙江巡撫採進本
握機經解	一卷	清・王暾	山西巡撫採進本
太公兵法	一卷	（不明）	浙江範懋柱家天一閣藏本
孫子參同	五卷	（不明）	江蘇巡撫採進本
孫子彙徵	四卷	清・鄭端	直隷總督採進本
十六策	一卷	三国・諸葛亮	永樂大典本
將苑	一卷	三国・諸葛亮[2]	浙江範懋柱家天一閣藏本
心書	一卷	三国・諸葛亮	陝西巡撫採進本
兵要望江南歌	一卷	唐・易静	浙江巡撫採進本
武經體註大全會解	七卷	清・夏振翼	内府藏本
將鑑論斷	十卷	宋・戴少望	兩淮鹽政採進本
江東十鑑	一卷	宋・李舜臣	兩淮鹽政採進本
美芹十論	一卷	宋・辛棄疾	浙江鮑士恭家藏本
南北十論	一卷	宋・許學士	永樂大典本
百將傳	一百卷	宋・張預	浙江范懋柱家天一閣藏本
八陣合變圖説	無卷數	明・龍正	兩淮鹽政採進本
北邊事蹟	一卷	明・王瓊	戸部尚書王際華家藏本
西番事蹟	一卷	明・王瓊	戸部尚書王際華家藏本
海寇議	一卷	明・萬表	戸部尚書王際華家藏本
塞語	一卷	明・尹耕	浙江范懋柱家天一閣藏本
備倭記	二卷	明・卜大同	編修程晉芳家藏本
兩浙兵制	四卷	明・侯繼國	浙江巡撫採進本
將將紀	二十四卷	明・李材	内府藏本
運籌綱目	八卷	明・葉夢熊	浙江巡撫採進本
軍權	四卷	明・何良臣	浙江巡撫採進本
倭情考略	一卷	明・郭光復	兩淮鹽政採進本
長子心鈐	無卷數	明・戚繼光[3]	兩江總督採進本
莅戎要略	一卷	明・戚繼光	編修程晉芳家藏本

[2] 同書の記述によれば、後世の人物による偽作と判断している。
[3] 注釈 2 と同じ、後世の人物による偽作と判断している。

武備新書	十四卷	明・戚繼光	江蘇巡撫採進本
古今將略	四卷	明・馮孜	浙江巡撫採進本
嶺西水陸兵紀	二卷	明・盛萬年	浙江巡撫採進本
劍草	一卷	明・熊明遇	兩淮鹽政採進本
嶺南客對	一卷	（不明）	浙江范懋柱家天一閣藏本
左氏兵略	三十二卷	明・陳禹謨	浙江巡撫採進本
類輯練兵諸書	十八卷	明・董承詔	浙江巡撫採進本
火器圖	一卷	明・顧斌	浙江巡撫採進本
兵機類纂	三十二卷	明・張龍翼	江蘇巡撫採進本
廣名將譜	十七卷	（不明）	浙江巡撫採進本
左略	一卷	明・曾益	浙江汪啓淑家藏本
談兵髓	七卷	（不明）	安徽巡撫採進本
殘本金湯十二籌	八卷	明・李盤	江蘇周厚堉家藏本
左氏兵法測要	二十卷	明・宋徵璧	江蘇周厚堉家藏本
兵鏡	十一卷	清・鄧廷羅	兩江總督採進本
武備志略	五卷	清・傅禹	内府藏本
歴代車戰敘略	一卷	清・張泰交	兩江總督採進本
練閲火器陣紀	一卷	清・薛熙	兩江總督採進本

この『四庫全書総目提要』の調査結果と前述の前田（2006）を合わせて分析してみたい。

①については、まずは 1606 年三要元佶によって、伏見版の武経七書[4]が刊行されたことが窺える。また、近世の日本では、数多くの『孫子』注釈書も書かれていた。林羅山『孫子諺解』(1626) や山鹿素行『孫子諺義』(1673)、新井白石『孫武兵法択』(1722)、荻生徂徠『孫子国字解』(1750)、佐藤一斎『孫子副註』（1840）、吉田松陰『孫子評註』（1859）といったものが代表的なものである。さらに、戦国時代の戦史研究とも合わせて、兵学自体は儒学、易学、医学などと並ぶ主要な学問として確立されていたと見られる。

また②の場合、つまり明の兵家の受容については、表‐1 と表‐2 からは、明代の兵家著作の数が圧倒的に多いことが観察される。もともと、明の時代は中国の兵家が隆盛になる時代である。火薬兵器などの発展やそれに伴う技術、戦術の変化と革新、また長期間に渡る北方民族や倭寇などとの抗争、いわゆる南寇北虜によって戦乱が頻発した社会環境など、いずれもがその理由であると思われる。新しい軍事制度や技術を論じた兵学著作が多く現れ、これらの兵書は新たな用兵思想や戦略思考を論じたり、新たな軍事領域の技術を解説したり、そして前人の経

[4] 武経七書：中国における兵法の代表的古典とされる七つの兵法書：『孫子』、『呉子』、『司馬法』、『尉繚子』、『三略』、『六韜』、『李衛公問対』。

験をよりよくまとめたものであったりもする。[5]また、明代以降は印刷業の発達が書籍の流通や商業化したこともその要因であると思われ、多くの兵書がその時期から日本へも流入したと考えられる。

これについて、大庭（1967）でも、江戸時代における唐船持渡書の記録が示されている。それに従い、また上記の『四庫全書総目提要』の調査結果を参考とし、日本に伝わった兵学、軍事関係のものを整理したものが、以下の表‐3 である。

表-3　江戸時代における中国兵書の伝来記録（大庭（1967）に基づき作成）

書名	巻数	日本に入った時期とその記録
孫子答問略	一部六本共六巻	1694 年（元禄七年大意書控）
江南経略	一部一套	1694 年（商船載来書目古字号　元禄七甲戌年）
孫子明解	一部五本	1694 年（商船載来書目曽字号　元禄七甲成年）
武経全題講義通考	一部四本	1698 年（商船載来書目不字号　元禄十一戊寅年）
武備要略	一部十一本	1700 年（商船載来書目不字号　元禄十三庚辰年）
武経正説	一部四本	1705 年（商船載来書目不字号　寶永二乙酉年）
武備志	一部八套	1710 年（商船載来書目不字号　寶永七庚寅年）
武経全解	一部十本一套	1714 年（齎来書目　正徳　正徳四年甲午）
籌海図編	一部一套	1724 年（商船載来書目志字号　享保九甲辰年）
登壇必究	一部四喜	1725 年（商船載来書目登字号　享保十乙巳年）
紀効新書	一部二套	1727 年（商船載来書目幾字号　享保十二丁末年）
武経七書全文	一部四本	1727 年（商船載来書目不字号　享保十二丁未年）
兵鏡備考	一部二套	1727 年（商船載来書目邊字号　享保十二丁末年）
虎鈐經	一部一套	1731 年（商船載来書目古字号　享保十六辛亥年）
兵録	一部四套	1734 年（商船載来書目邊字号　享保十九甲寅年）
左氏兵略	一部六套	1765 年（商船載来書目佐字号　明和二乙酉年）
武備志略	一部二套	1767 年（商船載来書目不字号　明和四丁亥年）
武経七書匯解	一部二套	1768 年（商船載来書目不字号　明和五戊子年）
武経大全纂序集註	一部一套	1783 年（商船載来書目不字号　天明三癸卯年）
練兵纂要	一部一套	1783 年（商船載来書目多字号　天明三癸卯年）
練兵實紀	二部各二套	1841 年（書籍元帳　天保十二丑歳）
武経七書合箋	一部八本	1841 年（書籍元帳　天保十二丑歳）
武備秘書	二部各一套	1848 年（書籍元帳　弘化五歳申四月）
防海備覧	三十部各一套	1852 年（書籍元帳　嘉永五年）

[5] 王（1996）p.1 による。

海國圖志	三部各六套	1852 年（書籍元帳　嘉永五年）
武経七書集注	一部一套	1853 年（書籍元帳　嘉永六年丑四月）
神致理兵法心要	四本一部一套	1855 年（卯壹番船書籍元帳　安政二年卯十一月）
戰守鈔略	一部一套	1855 年（卯壹番船書籍元帳　安政二年卯十一月）

表に示すように、『孫子答問略』、『武経全解』、『武経七書集注』などの在来兵書の注釈本の伝来記録も多く見られるが、中国の文献資料を調べた結果では、その作者や成立時期が判明しないものも多く存在している。いずれも、明の時代以降における兵学書の煩雑を反映していると思われる。

また、『練兵実紀』、『神致理兵法心要』のように、一部には江戸末期で、やや遅い時期の伝来記録しか残されていないものも見られる。もちろん、筆者の調査不足や実際記録が残されていないという問題にも考慮を入れたが、前述のように明の時代は印刷業の発達から書籍が多く出版、流通されたという時代背景もあるため、そのような書物は長崎船に経由して早い時期から日本へ流入することも不可能ではないと考えられる。次節では、これらの漢籍とその語彙が、近世日本兵学にどのような影響を与えたのかについて検討を行う。

2　江戸時代の兵学特徴と中国伝来兵書の影響

周知のように、江戸時代の日本では、武士階級により統治されていた。武士が制定する法によって支配された日本社会にとって、兵学の隆盛は日本という国を治め、その武士支配の国家体制を正当化、完備するためでもあった。

また、前述のように、この時代では戦争がほとんどないため、具体的な作戦部隊の運用や編制などのいわゆる陣法、戦法部分についての研究は下火になり、形骸化された側面もある。当時の兵学そのものは用兵法の研究よりも、武家政権である江戸幕府より国家支配の価値観の強化の方がよく論じられ、このことには武士道などのような思想学と倫理学といった部分も多く含まれていた。

そして、当時の日本では西洋諸国に対する警戒から鎖国政策がとられた事情もあり、西洋の勢力が日本に進出すれば幕府の支配を揺るがすだろうと恐れているからだと思われる。

それに対し、当時の中国では、明の時代以降、海上か来襲した敵つまり倭寇の脅威は歴代王朝にとって未曾有の事態であった。対策を考えることは、もちろん当時の兵家にとって一大事であったと思われる。そのため、明代の兵書の中では特に海防を論じたものが現れ、こうした部分では中国軍事史において画期的なものであった。

たとえば、茅元儀著『武備志』は、海防について以下のように述べている。

茅子曰、防海豈易言哉、海之有防自本朝始也、海之嚴于防自肅廟時始也。

（茅子曰ク、海ヲ防グコト、豈ニ言ヒ易カランヤ、海ノ防ギ有ルコト、本朝ヨリ始マルナリ、海ノ防グヨリ厳クコト、肅廟ノ時ヨリ始マルナリ）　『武備志』巻 209

このように、情勢がよく似ていた日本は、海防思想を論じた明代の兵家著作から影響を受けたと思われる。前述の前田（2006）でも、

近世日本の人々は、ちょうど明代の人々が倭寇＝夷狄に抱いたような恐怖感をもって、西洋列強＝夷狄を受けとめ、もともと倭寇の侵略に抗するための明代の海防論を自らの国を守るための一つのモデルとして受容していったのである。

と述べている。また江戸時代に出版された明代の兵書については

近世前期には劉寅『武経直解』25 巻（1643 年和刻）、黄献臣『武経開宗』14 巻（1661 年和刻）などの明代の注釈書が和刻され流布したが、それとともに注目すべきは、戚継光撰『紀効新書』18 巻（1788 年和刻）、『練兵実紀』9 巻・雑集 6 巻、茅元儀編『武備志』240 巻（1664 年和刻、鵜飼信之訓点）、王鳴鶴編『登壇必究』40 巻、何汝賓編『西洋火攻神器説』1 巻（1802 年和刻、平山潜校）、趙士楨撰『神器譜』1 巻（1808 年和刻、清水正徳校）などの兵書である。

というような例を挙げ、江戸幕府は中国明代の兵家思想の資料を積極的に受容していたことを説明している。

実際、日本近世兵学の代表流派である長沼流兵学の祖長沼澹斎も、明の兵学書『武備志』や『紀効新書』を熟読し、その著書である『兵要録』（1666）[6]にもそれら明の兵学書から多く引用したというような例も見られる。

また、前節で述べたように、『孫子』の各注釈書の作者の中には、林羅山、新井白石のような朱子学者、荻生徂徠のような徂徠学者が含まれ、いずれも純然たる兵学者ではなく、多くは漢学者でもある。そのため、兵書の釈においては、漢籍経典からの発想を活用し、用兵思想と国を治めること、つまり軍事と政治などの接点を探してその対立の部分に向かい合ったことがあると見られる。その時に漢籍に使われていた用語を用い、取り入れることもあると思われ、江戸時代における漢語多用の一つの要因でもあると思われる。

もともと、近代まで日本における漢語受容の根本理由としては、日本にとってはそれまで存在しなかった新概念や事物を日本固有の言葉に当てはまることができない時の補足である。その点について、鳴海（2015）においても

---

[6] 兵要録：長沼流の主要兵書で、1666 年（寛文 6）長沼澹斎（たんさい）（1635—90）32 歳のころの著作。（中略）澹斎は初め甲州流など和流兵法を修めたが、ついで戚継光の『紀効新書』や茅元儀の『武備志』など中国明代の兵書に着目し、理論よりも節制や実事を主体とする斬新（ざんしん）な学風を唱えた。『日本大百科全書(ニッポニカ)』による。

基本的に、漢語を受容するということは、それまで日本及び日本語に無かった概念や思想を取り入れるということである。概念や思想を言葉とともに受け入れるわけであるから、最も取り入れやすいものは体言的なものであるといえる。何らかの概念・思想を表す体言を、いわば生の外来語として受け入れたのがはじめであろう。

と述べられている。また、前節にも述べたように、中国の明代は軍事科学技術の進歩によって作戦方式などの変化と革新が著しく、それに伴い新語が創出され、さらに兵家著作のものを多く出版することで、世の中に迅速に広げることも可能だと思われる。その影響が、さらに明代兵学の吸収を重視する江戸時代の日本にも及んだのではないかと推測される。

では、これらの明代兵書が実際使用している用語の特徴について、ここではまず『紀効新書』を例として簡単にふれたい。金（2009）では、『紀効新書』の使用していた軍事用語は、かなり豊富で専門性も高いということを明らかにしている。たとえば、戦術動作用語には、戦闘については「出戦」、「交戦」、「接戦」、「迎戦」など、後退については「退還」、「退縮」、「却回」、「逃走」、「敗走」などに明確に使い分けがされているという。[7]さらに、それらの用語は在来の用語を継承しながら、明代から出現した新語（たとえば火薬兵器の名称やその使用方法に関する用語）も多く使用されていたというようなその時代の特色を強く反映されていたと述べている。[8]

実際、本稿冒頭に触れた『和独兵語辞彙』に関する調査結果からも同じ現象が見出された。当調査では、以下に挙げる 24 語は、中国の明代の文献から語例を発見でき、そして現在まで日中両言語に使用されていたことを明らかにしている。

（見出し語、用例文、出典文献名の順）

爆破	「如陸戰對敵、放去爆破砂下」	『武編』前集卷五
彈藥	「用子砲五門、并彈藥逓減」	『軍器圖説』
號砲	「如有倭犯情形、則舉放號砲、島島相傳」	『明經世文編』卷四百一
軍歌	「軍歌凱曲、捷傳金馬之門」	『經略復國要編』卷九
軍艦	「當道有知之者委造軍艦、其利頗餘」	『本朝分省人物考』卷九十八
飯盒	「硃紅竹絲茶飯盒一副」	『工部廠庫須知』卷十一
砲弾	「砲彈、以碎鐵蘸藥、可一發傷兩人」	『武備志』卷二百三十九
砲撃	「乃砲擊其壘、虜死砲下者萬計也」	『皇明經濟文録』卷二
補給	「急宜修築補給、以備不虞」	『國朝獻徵録』卷十五
歩哨	「歩哨把總趙應捷帶領歩軍五十名、設防大康堡」	『撫遼奏議』卷十七
地雷	「地雷、製以圓石爲砲、繇中鑿空、其口内寛外狹」	『軍器圖説』

[7] 金（2009）p.10 による。

[8] 金（2009）p.51 による。

實戰	「學戰、實戰皆照此攻擊、進止不易」	『兵録』巻二
海戰	「往歳用師、凡克捷者、俱在海戰」	『倭變事略』巻二
近戰	「近戰則以鎗筅鎧牌之類、當彼長刄」	『海防奏疏』
攻勢	「葛隆屯賊綠堞、而攻勢甚急」	『國朝獻徵録』巻一百二十四
挾擊	「左右挾擊、前抄其胸、後掩其尾」	『武備志』巻六十一
立射	「軍士皆下馬立射、殺百餘人」	『弘簡録』巻二百三十二
炸藥	「鑿以孔。内入以炸藥、築之以土」	『戰守全書』巻十二
支隊	「支隊哨長教習缺、或於本隊哨或於別隊哨」	『南京都察院志』巻九
哨兵	「雖有哨兵探馬、恐一時搜索不到」	『戰守全書』巻二
哨所	「莫先于獨石之哨所、謂薊得其情」	『全邊略記』巻一
水雷	「水雷入水丈餘、沈伏港」	『陣紀』巻四
停戰	「楚與宋戰、宜僚披胷受刃於軍前弄丸鈴、一軍停戰、遂勝之」	『南華真経循本』
増援	「覆昌平陳總兵請増援」	『度支奏議』巻三十三

上記の語では、明代以降における新兵器、新戦術の出現によって新語を創出した時代背景を強く反映していたと見られる。こうした用語は、一見近代以降の日本製漢語に思われ、誤認されやすいものも多い。さらに、大庭（1967）における明末から清代舶来の漢籍文献の伝来記録と合わせて見ると、中国の漢籍兵書出自の用語は大量に日本に伝わり、定着したこともあり得ると考えられる。また、近世日本の兵学言説は、いずれも中国の明代の漢籍兵書に大きな影響を受けていたのではないかと考えられる。

しかし、前述のように、江戸時代の兵学では具体的な戦術戦法に関する内容は形骸化されたことも多いため、以上のような専門性の高い軍事用語は、実際近世の日本語の中にすでに活用されていたのかどうかは疑問である。これらの語は、むしろ一種の語彙資源として一時的には保存されていて、そして後の幕末以降の西洋語を翻訳する際にようやく用いられ、訳語として大きな役割を果たしたのではないかと想像される。

3　幕末・明治期における近代兵学の確立と漢籍語の役割

江戸時代後期の 1800 年代以降になると、ロシア人の択捉攻撃（1797）やイギリス軍艦フェートン号の長崎侵入（1808）などといった事件の勃発が相次いで、東アジアに漲る不穏な情勢、つまり西洋列強からの脅威が迫る危機意識がますます高くなっていた。そしてアヘン戦争における清の敗北という衝撃を受けて、幕府は旧来の兵学流派の反対にもかかわらず、さっそく高島秋帆の『天保上書』という意見書を受け入れ、彼は自費でオランダから学んで完成させた高島流洋式砲術を採用している。そしてこれを契機に、幕府や諸大名たちは蘭学に通じて、海軍、

陸軍、砲術や築城といった軍事分野での専門知識を一挙に導入する。すなわち、西洋兵学への転身である。

ただ、ここで一つ忘れてはいけないこととして、幕末に至り、蘭学の兵学を興しても、実際当時の日本における西洋列強に対する戦略の原点は、前述の前田（2006）が述べたように、依然として明代兵家の倭寇対抗策と一致している点がある。それが、幕末の兵制転換と海防論を中心とする内容であれば、蘭学から兵学の導入時にも、中国から受容された在来兵学の影響を大きく受けたのだろうと思われる。

そして、蘭学の知識を利用して西洋の兵学著作を翻訳する際には、2 節で触れた現存の漢籍兵書の語彙資源が利用されていたこともあると思われる。

元来、翻訳という形式は、自国語の中にその外国語の意味に相当する言葉を当てはめ、そして置き換えることが基本である。森岡（1959）ではそうした現象について、

> 漢語は、長い歴史を通じて、日本語のあらゆる部分に食いこみ、公用語はもちろん、民衆の日常語にいたるまで、大量に使用されていたことはいうまでもない。外国語の翻訳の必要が生じた場合、まず、これら在来の漢語で置きかえるということは、最も自然な勢いであったであろう。確かに、これらの漢語が訳語の際の重要な資源であったことは疑えない。

と述べている。つまり、このような近代以前からすでに日本に伝わっていた可能性の高い在来漢語は、むしろ近代翻訳語の下地となっていたのではないかと考えられる。

ここで「下地」となった漢籍兵書から伝わってきた語彙の特徴を再度に目を向けてみよう。金（2009）では、以下に述べている。

> 我们可以根据意义把其分为以下两类:其一是表示军事动作类。（中略）其二是表示军事名物的词语。军事词语中表示军事动作的词语时代性不强，毕竟，军事动作很难随时代的变化而变化。而军事专有名词却不一样，其时代性非常强。军事专有名词富有时代性，大致是有以下几个原因决定的。首先，兵器与旗帜等军用物品总是随时代的发展而改进，新的不断产生，旧的逐渐退出舞台。
>
> （筆者訳：用語の語義別によって二種類に分けられる：その一つは軍事動作類の用語である。（中略）そして軍事用品、器物に関する用語である。その中の軍事動作に関する用語の時代性は、特に強くない。なにしろ、軍事動作は、時代の変化に従って変化することがあまりないのである。しかし、軍事用品、器物に関する専門用語では違う。まず、兵器や旗などの軍用品は、時代の発展とともに改良され続けている。新しいものは随時に生まれ、古いものはいずれ歴史の舞台から去るのである）

以上のような現象と類似するものとして、1840 年代成立の初期洋式兵法書の訳本である『海

上砲術全書』[9]（以下『海上』に略す）にも、凡例に次のような説明文が述べられている。

書中説ク所熕礮及ヒ其他諸器ノ名。若シ偏ニ原名ノミヲ挙ルトキハ。啻ニ冗長厭フベキノミナラズ。コレヲ読テ異言ノ多キニ堪ヘザルベシ。故ニ幸ニシテ漢名ノ填スベキ者アレバコレヲ填シ。其無キ者ハ皆務メテ新タニ訳名ヲ下ス。庶幾クハコレヲ読テ耳目ニ記シ易カラムコトヲ欲シテナリ。但其新名ノ極メテ典雅ナラザラムコトヲ恐ルヽカ為ニ。其初見ノ下ニハ必原名ヲ細注ス。

要するに、漢籍などの文献資料にその意味に相当する漢語が該当すれば、それを優先的に活用し訳語として当てはまるであろう。森岡（1959）のいう翻訳の際における在来漢語が、優先的に使用された原則を再度鑑みれば、むしろ一致している点があるのではないかと思われる。だが、「熕礮及ヒ其他諸器ノ名」のような銃砲と器物名の多くは、その時代特有なものであるため、漢籍兵書からその意味に相当する語彙を探すことは多少困難だと思われ、苦労して独自に訳語を創作しなければならないと言えよう。

また、松井（1979）では、『海上』が成立した時期以前には、このような翻訳兵学書がほぼなかったため、その影響は兵学に関してだけではなく、用語についても大きな影響を与えたと述べている。つまり、数年後に成立した他の複数の翻訳兵学書が『海上砲術全書』からその訳語を多く流用した可能性が高いと見られる。表‐4 では、松井（1979）が挙げていた『海上』から見られる漢語例の中で、その後に成立した他の複数の翻訳兵学書（3 部以上）にも使用したものを抽出し、その上で漢籍出典についてあらためて調査した結果を示した。（用例は『海上』のものを基準とし、“○”の有無は各翻訳書が使用しているかないかを示す。そして一番右の列に各語における漢籍の出典も併記する。）

表に示されるように、翻訳の際、偶然にして在来漢語と一致した語を造っていた可能性も考えられるが、大部分の語は漢籍資料を利用し、意味が相当するものを借用してきたと思われる。

さらに、後の各翻訳兵学書は『海上』の影響を強く受けていたことから、用語の翻訳方法などは引き続き流用されていただろうと思われる。実際、前節に述べていた『和独兵語辞彙』の収録語彙からも同じ現象が認められた。同書では、武器のような実物名は新造語使用の場合が多いことに対して、戦術行動などを表現する抽象な用語では、中国古代兵法書や歴史書などのような漢籍から相当する在来漢語を用いているというような特徴が見られる。すなわち、多くの翻訳兵学書が出版され、翻訳システムがすでに完成していたとされる時代、少なくとも 1900 年代までにおいては、その翻訳方法および訳成された語彙の仕組みはほぼ泰然として、むしろ

[9] J・N・Calten 著 *Leiddraad bij het onderrigt de zee-artillerie* の和訳本。宇田川榕庵ほか数名が幕命を受けて翻訳していた。発刊は安政元年（1854 年）になっているが、その写本は諸藩にいち早く転写されたという。

『海上』の時代から受け継がれたものではないかと思われる。

表‐4 『海上』と幕末の兵学書に見られる翻訳語（松井（1979）に基づき作成）

	『海上』の所在	①海岸	②遠西	③三兵	④生兵	⑤散兵	⑥築城	⑦砲科新	⑧和蘭	⑨慕氏	⑩野戦	⑪祓隊龍	⑫歩操	⑬兵家	⑭歩兵	⑮仏蘭西	⑯砲科日	漢籍における出典
圧迫	4 巻 4			○	○			○									○	なし
外部	1 巻 11		○	○													○	晋『甲乙經』
活用	26 巻 6			○			○							○	○			南北朝『雑阿含經』
距離	5 巻 10			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	宋『續資治通鑒長編』
僅少	19 巻 1			○						○				○				宋『論語集説』
経験	10 巻 6			○				○		○						○		元『農桑衣食撮要』
原因	17 巻 5			○				○		○	○							明『大唐秦王詞話』
固定	11 巻 5			○		○	○								○		○	金『儒門事親』
最良	22 巻 15			○									○	○		○		晋『三國志』
算定	18 巻 5			○			○			○				○				南北朝『元包經傳』
時間	24 巻 1									○			○	○		○		なし
時限	15 巻 2、3				○	○								○	○			なし
実弾	5 巻 19									○				○			○	なし
瞬間	1 巻 11			○		○								○		○		南北朝『正一法文天師教科經』
水平	2 巻 15	○						○	○									なし
説明	27 巻 8			○											○	○		南北朝『四分律』
総称	1 巻発端 1			○							○			○			○	周『難經本義』
装置	1 巻発端 3						○	○		○	○		○				○	明『兵録』
遂次	10 巻 12			○	○	○				○		○	○	○				宋『包孝肅奏議』
通常	22 巻 19	○		○	○	○	○			○				○	○	○	○	漢『論衡』
抵抗	7 巻 11			○						○				○			○	宋『大金國志』
定量	2 巻 9	○		○													○	唐『大毗盧遮那成佛經疏』
適宜	5 巻 6			○	○	○		○		○				○			○	春秋戦国『尉繚子』
内部	10 巻 5			○			○		○		○						○	晋『甲乙經』
必要	1 巻 13			○						○			○	○				宋『翠微北征録』

表面	7 巻 29	○					○	○										元『居家必用事類全集』
物件	8 巻 17			○				○			○		○	○				宋『夷堅支志』
編成	1 巻原序 1				○	○					○	○	○	○				隋『中説』
用法	28 巻 21	○		○			○	○		○				○		○		晋『肘後備急方』

[10]

これについて、片岡（1989）では

洋学は漢学の上に築き上げられたものである。洋学者たちは旧思想を徹底的に攻撃しても、根底にある儒教そのものは否定しなかったし、学習形式をはじめ多くの点で洋学は漢学の祖型に従っている。そもそも漢学を修めないことには、洋書を解する語彙力がないと考えられていた。（中略）漢学者にとって、原理原則は古代の聖人が生み出した所与の存在であり権威であり、原理原則の新たな創出は関心の外にあった。他の洋学の部門と同様、幕末の洋式兵学は、西洋軍事科学の全てを導入したのでは決してない。出版された書目は、砲術や操練など実践的実用的な領域である。

と述べる。漢学者は伝統、在来のものを重視し、新たに取り入れるものはあくまでも己の短所を補足であるというような保守的な一面を持っていたことを主張している。つまり、明治維新以降、完全に西洋式の軍事制度に転換された後でも、中国由来の兵家思想やそれに関する漢籍兵書の影響は、依然として根が深くて、ほぼ動きのないまま続いていたと見られる。終戦まで、日本の軍事用語には漢語が多用されている慣習も、むしろ漢学者なりの方法が受け継がれ、こうしたことから出発していた可能性もあるではないかと思われる。

終わりに

本稿は、近世日本兵学の成立発展に資していた中国の漢籍兵書の伝播ルート、それに伴って伝ってきた語彙の特徴そして後世への影響について調査を行った。以下では、要約および若干の補足について述べたい。

---

[10] ①海岸：『海岸砲術備要』（1852）本木正栄訳；②遠西：『遠西武器図略』（1853）市川恭訳；③三兵：『三兵答古知幾』（1856）高野長英重訳；④生兵：『生兵教練』（1857）訳者未詳；⑤散兵：『散兵定則』（1858）安場敬明訳；⑥築城：『築城新法』（1859）広瀬元恭訳；⑦砲科：『砲科新論』（1861）大鳥圭介訳；⑧和蘭：『和蘭王兵学校掟書』（1861）神田孝平訳；⑨慕氏：『慕氏兵論』（1863）曽田勇次郎訳；⑩野戦：『野戦要務』（1863）大鳥圭介訳；⑪祓隊龍：『祓隊龍図解』（1866）訳者未詳；⑫歩操：『英式歩操新書』（1867）瓜生三寅訳；⑬兵家：『兵家須知戦闘術門』（1867）大村益次郎訳；⑭歩兵：『英国歩兵練法』（1867）赤松小三郎訳；⑮仏蘭西：『仏蘭西答屈智幾』（1867）村上英俊訳；⑯砲科：『砲科日新』（1868）橋爪貫一訳。

まず、江戸時代の兵学研究が整備される際に、中国の漢籍兵書の説を多く受容していたと見られ、そしてその用語は後の幕末・明治期以降における西洋語を翻訳する際に訳語として活用したと思われる。

さらに、片岡（1989）が述べるように、洋式兵学に転換されたとは言え、漢学という祖型から脱却することがない。その影響下で、後の翻訳制度がすでに完熟し、新造語による外来の新概念を当てることも一般的になった時代に至っても、軍事分野の用語は依然として在来漢語が多用され、その分野の用語の全体に大きな割合を占めていたと見られる。

しかし、以上のような在来漢語により西洋語を置き換える方法は、いくつかの限界と対応性の欠如さも存在したと思われる。初期の翻訳作業には、外国語に対する理解不足も一つの理由だと考えられ、つまりそれらの在来漢語を使って新概念に当てはまる時に画然と表現できない時がある。たとえば、「戦争」という語について、今日では英語の war に相当する訳語ではあるが、明治中期までは、「争い」、「闘争」「戦闘」、「軍」（いくさ）などの意味も混在されており、併用された時期がある。『英和対訳袖珍辞書』における war の訳語は「合戦」ではあるが、「戦争」では warfare、war-red-ring、conflict、brawl、interference などこれら複数の語の訳語として使われていた。しかもそれと同時に「軍」、「突キ当リ」、「相撲」、「喧嘩」、「騒動」などの表現も併用された。一方、『和英語林集成』（初版）における War の和訳としても Ikusa（軍）, ikusa suru（軍する）, tatakau（戦う）が使われており、「戦争」の英訳では battle, to fight であることが見られる。今日的な War の概念に対応する訳語として定着したのは 1881 年に刊行された『五国対照兵語字書』の用例が出現した後の明治中期以降である。

このような複数の概念の区分があいまいな翻訳現象は、近世中国にも見られる。たとえば、ロプシャイトの『英華字典』における war の訳語も「打仗」、「戰」、「交戰」、「出戰」、「動兵」、「攻國」などのような表現が用いられ、「戦争」という語が、その概念とはっきり対応されていないと見られる。周知のように、近代日本は翻訳制度を整備する際に英華字典を活用したが、その欠点のある部分も受け続がれたことも見られる。

特に、抽象的軍事動作な軍事概念は、多く在来漢語に訳成することも多く観察される。金（2009）にも述べられたように、軍事動作類の用語はほぼ変わることがなく、その在来性が高いからであると思われる。そのため、こうした複数の表現が混在し、異なる概念へのはっきりの対応が欠如していたことが、幕末、明治初期における軍事用語の整理不足という側面も示していると見られる。

そのようなこともあるから、後には翻訳事業が整備する際に、訳語の意味を厳密に区分による再構築が行われ、今日が使われていたような漢語の用法が統一されたと見られる。さらに、そのような訳語の意味用法を普及するために、『五国対照兵語字書』のような「兵語辞典」と呼ばれた軍事用語の対訳専門辞書が相次いで編撰されていたではないかと思われる。

参考文献

愛新覚羅永瑢（清）『四庫全書総目提要』清乾隆武英殿刻本
宇田川榕庵（1854）『海上砲術全書』大野文庫蔵版
森岡健二(1959)「英和辞書における漢語訳の方法」　学校教育研究所紀要第 3 巻
大庭脩（1967）『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所研究叢刊
松井利彦（1979）「近代漢語伝播の一面」　広島女子大学文学部紀要 14
片岡徹也（1989）「日本陸軍の兵学研究と漢学の祖型」軍事史学 25‐2
王聯斌（1996）「明代兵書及其軍事倫理思想」軍事倫理思想研究
前田勉（2006）『兵学と朱子学・蘭学・国学　近世日本思想史の構図』　平凡社選書
金双平（2009）『紀効新書』軍事詞語研究　南京師範大学修士学位論文
鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の受容の研究　副詞化を中心として』ひつじ研究叢書〈第 125 巻〉

謝辞：本稿の一部は第 327 回日本近代語研究会に行われた口頭発表の内容に基づき、その同時に別の研究によって入手できた資料なども追加して、書き直したものである。発表の際にして、花園大学の橋本行洋先生をはじめ、飛田良文先生（国際基督教大学）、陳力衛先生（成城大学）、櫻井豪人先生（茨城大学）から貴重なご意見を賜った。この場で特記して謝意を表する。

『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで）。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000字（400字詰め原稿用紙40枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windowsは、微軟PINYIN2.0（簡体字）、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』，大阪：しずみ書房，2000年10-20頁

Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」，『或問』第1号，2000年2-15頁

Fryer, John. “Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity.” *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎(2000:2-15)のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000bのように区別する。

内田慶市（keiuchid@pp.iij4u.or.jp）
沈　国威（shkky@kansai-u.ac.jp）